シェリ

―『世俗の凱旋』―

森　清

一九三三年二月十七日、T・S・エリオットは、ハーヴァード大学において、「シェリとキーツ」（'Shelley and Keats'）と題する一場の講演をおこなつたが、われわれは、今日、それを彼の評論集『詩の効用と批評の効用』（*The Use of Poetry and the Use of Criticism*）[1]において読むことができる。エリオットは、キーツのいわゆる「消極的能力」（Negative Capability）に注目し、特定の理論をもたず、しかも、シェイクスピアと同じ意味で「哲学的」な詩人の資質を、「理論づけるたちの」ワーヅワスやシェリ、「詩」と「観念」とをきりはなし得ない詩人の場合と対照させているが、彼みずからもいうごとく、後者の詩人のタイプを、かならずしも否定しているわけではない。問題は、「詩」ときりはなし得ない、詩人の「観念」如何にある。シェリの場合、彼の観念は、他からの借りものであるが、そのかぎりでは、彼は正しいといわなければならない。なぜなら、一人の人が同時に詩人であり哲学者であることが、そもそも最初から無理なのであつて、コウルリヂの場合のごとく、結局は、いずれか一方のはたらきを犠牲にしなければならない。詩人は哲学を借りてくるか、それとも、それなしでやればよいのだから。ただ、シェリが他から借りてきた諸々の哲学が貧弱であり、しかも、それらが彼自身の直観とごたまぜになつているところに、問題がある。詩のうちに表現された理論や信念が、経験的事実にもとづく、円熟したものとして受けとれるなら、それは、詩の鑑賞をさまたげるものではない。その理論、信念を是認するか否定するかは、また、別の問題であろう。しかしながら、シェリの場

合のごとく、それが幼稚であり、貧弱であり、ひいては、ユーモアに欠け、ペダンティックで、自己中心的で、ときには、下司にも近い彼の人がらを想起させるとすれば、彼の詩がその観念からきりはなし得ない以上、彼の詩の鑑賞は、完全にはばまれてしまうであろう。エリオットは、シェリの詩に対する自分の嫌悪が、読者たるエリオットの側の偏見に帰せられるべきではなく、詩そのものの中に存在する或る特性のしからしめるところであるとして、以上のごとく述べている。

こうした所論に対しては、ハーバート・リードが、「私から人間的、地上的なものを期待するのは、羊肉の足を求めて、酒屋へゆくようなものだ。」とのシェリの手紙の一節を引用したうえ、詩人の個性の面からシェリの詩を正当化し、「詩人が本来もたないものを達成することができなかつたと非難するのではなく、詩人に属し、人類に特に価値ある諸性質を、比類なく完全に、表現している点を賞讃し」ようとこころみたが、[2] それは、いま、当面の問題ではない。私は、この講演でエリオットが、スペンダー(Stephen Spender)も指摘している『エピサイキディオン』(*Epipsychidion*)の一節など、[3] いずれもシェリの欠点の実例として掲げられた幾つかの詩節のほかに、『世俗の凱旋』(*The Triumph of Life*)から次の一節をひいていることに、注意したいと思う。しかも、エリオットは、この未完の詩――シェリが溺死した当時、筆をとつていた――を、彼のもつとも偉大な詩としたうえ、そこには、以前のどんな長詩よりもすぐれた書き方、より偉大な智慧の証拠があるとして、この一節をあげるのである。

'Then what I thought was an old root that grew
To strange distortion out of the hillside,
Was indeed one of those (*sic*) deluded crew
And that the grass, which methought hung so wide

And white, was but his thin discoloured hair
And that the holes he vainly sought to hide
Were or had been eyes ...[4]

(「私が山腹から奇妙にねじれて
生えでている古い木の根と思ったものは、
実は、あの惑わされた連中の一人であった。
そして、あんなに広く、白くたれていると思えた草は、
ただ、色変じた、うすい髪、
隠そうとしても無駄だった穴は、
目であり、あるいは、あったのだ……」)

これは、詩人の目に映じたルソーの姿であるが、この描写に、エリオットは、従来シェリに見られなかったイメージの精密さと簡潔さを認めている。ところで、エリオットは前に、「よりすぐれた書き方」、「より偉大な智慧」といったが、もし、これらを言葉通りにとるならば、イメージの精密さと簡潔さとは、むしろ、前者、すなわち、「よりすぐれた書き方」に属するのではなかろうか。もっとも、この前後の文脈では、エリオットの目的は、シェリの詩的天禀の成熟に、彼の精神がかならずしもついてゆけなかったことを強調することにあり、このすぐあとにつづけて、シェリがゴドウィン(William Godwin)の影響を最後まで免れなかったことを指摘しているくらいであるから、そのかぎりにおいて、この詩の「より偉大な智慧」にここで触れる必要はなく、また、触れてはいけなかったとさえいえよ

う。だが、逆説的にいえば、シェリの詩をその観念からきりはなし得ないエリオットが、『世俗の凱旋』の偉大さを認めることは、すなわち、その観念の偉大さを認めることに他ならない。それなるがゆえにこそ、エリオットはまた、「以前のいかなる長詩におけるよりも、よりすぐれた書き方のみならず、より偉大な智慧の証拠がある」（傍点筆者）といわざるを得ないのであろう。そして、この「智慧」(wisdom) という語は、この詩をシェリの思想発達史上もつとも注目すべき大作の一であるとして、「彼が書いたすべての詩のうちで、もつとも偉大であり、もつとも賢明なもの」[5] と述べた、ダウデン (Edward Dowden) のあの「もつとも賢明な」(the wisest) という形容詞とも呼応するものである。謎の一句、'Then, what is life? I cried.'——で中断されたこの最後の未完詩にふくまれた「知慧」とは、いつたい、何なのであろう？

この詩において、life のページェントに加わることを慎むもの、すなわち、自己を知り、自己を抑制しうるもののほか、いかなる者も破滅と囚縛を免れない。諸々の国王、政治家、哲学者、詩人、その他不滅の名をかち得た多くの人々が、life の車につながれている。プラトンさえもそこにいるが、ソクラテスとキリストはいない。（ノトポーロス (James A. Notopoulos) は、この二人もまた、life の車につながれた俘虜たちの中にいるように読みとつて、この矛盾に言及している[6]が、おそらくは、彼の読みちがえではなかろうか。）ソクラテスとキリストは、まさしく、

... the sacred few who could not tame
Their spirits to the conquerors — but as soon
As they had touched the world with living flame,[7]
Fled back like eagles to their native noon.

（……その魂を征服者に従わせえず——
燃える熱情をもて世を動かすやいなや、
鷲のよう、白日の空の住家に
とびかえつた神聖な少数者。）

のうちにいるのである。

では、このように、ほとんどすべての人々を破滅にみちびくlifeの車は、はたして何であろうか。ストーウェル(F. Melian Stawell)は次のように説明している。

「Lifeの車は、このような梗概から明らかなように、『存在』全体をも、また、おそらく、人間生活、あるいは、人間の自覚意志からはなれた現世の全体をさえ、意味するものではあり得ない。むしろ、シェリは'life'という言葉を、新約聖書が'the world'について語るのとほとんど同じく、ただ、現世における人間社会の悪の面、すなわち、環境の激流、一となつて人間の個性を縛り、損い、砕く、人々の激情のうちにある、恐ろしくもまた魅惑的な諸々の要素を描くために用いているのである。それゆえ、人が正しい行為を怠るとき、とりわけ、その性格が環境のままに弄ばれるとき、かの'Life'は征服するのである。[8]」

四つの面をもつた馭者は、目隠しをされているが、これは運命といつてよいかもしれない（「世俗によつて目隠しされた詩人」とか、「人間の堕落と野蛮と盲目の象徴」とか、解する批評家もいる）。車はこの馭者によつて導かれつつ、威風堂々あ

たりを払つて進んでゆく、その馭者はいずれの方角も見えはしないのに。

All the four faces of that Charioteer
Had their eyes banded; little profit brings
Speed in the van and blindness in the rear,
Nor then avail the beams that quench the sun,—
Or that with banded eyes could pierce the sphere
Of all that is, has been or will be done;
So ill was the car guided — but it passed
With solemn speed majestically on.(9)

(その馭者の四つの顔はすべて
目かくしされていた。前の駿馬が速く駆けても、
後の馭者が盲では、ほとんど無益、
また、太陽を隠すあの輝きも役にはたたない。——
目隠しされていなければ、
現在、過去、未来にわたるすべてを見ることができたであろうが。
それゆえ、車の馭しかたはまずかつた——
しかし、車は堂々と進んでいつた。)

詩人は「不思議な思いの夢幻の境に」これを見るのであるが、これを説明するルソーもまた、世俗の徐々たる腐蝕の犠牲者の一人である。ほとんどすべての人々は、世俗の奴隷であり、彼らが不滅の名をかち得ているときでさえも、実は、世俗の機械的な目的に不知不識のうちに屈従しているのである。彼らは己れ自身を知りえず、また、彼らの力では如何ともならぬ霊的神秘を忘却し去つている。ルソーは、ナポレオンを、さらに、他の「人を害してみずから害せられた人々」、ヴォルテール、プロシア王フレデリック(Frederick, 1712-86)、ロシア皇帝ポール(Paul, 1754-1801)、ロシアの皇后キャサリン(Catherine, 1629-96)、神聖ローマ帝国皇帝レオポルド(Leopold, 1747-92)らを指し示す——

For in the battle Life and they did wage,
She remained conqueror.(12)

(なぜなら、「世俗」と彼らとが戦つた戦闘で、
「世俗」はなおも征服者であつたから。)

プラトンもまた、この世俗の車につながれている。そして——

Expiates the joy and woe his master knew not;
The star that ruled his doom was far too fair,
And life, where long that flower of Heaven grew not,
Conquered that heart by love, which gold, or pain,

Or age, or sloth, or slavery could subdue not.(11)

(彼の師も知らなかつた喜びと悲しみの償いを支払つている。
彼の運命を支配した愛の星は、あまりにも美わしすぎた、
そして、あの天の花が長く咲かなかつた人生は、
愛によつてあの心を征服したのだ、黄金も、苦痛も、
老齢も、怠惰も、奴隷の苦役も征服しえぬあの心を。)

「愛の星」とは、プラトンの同性愛の相手(Aster)をさし、「あの天の花が長く咲かなかつた」というのは、その青年の夭折を述べたものであろう。そこには、アレグザンダー大王やシーザー、アリストテレスやベイコン、「彼らが歌つた情熱に溺れなかつた」古代の大詩人たちや、「人と神との間に影のごとくに立つて」その霊交をさまたげた法王や高僧たちもいる。ルソーは、たしかに「知的美」(Intellectual Beauty)と思われる、光燦然たる幻を見たのち、自分がこの世俗の凱旋行列に加わることになつた次第を物語る。『アトラスの魔女』(*The Witch of Atlas*)のプラトニックな象徴、洞穴、噴泉、水晶の杯などが、ここでも描かれる。幻がさしだす水晶の杯に口をつけるや、その美わしい幻はしだいにうすれて、新しい幻がうかびくる。この新しい幻、世俗の凱旋の車に、ルソーもまた、捕えられたのであつた。そして、この行列の狂乱につかれはて、絶望して、路傍に倒れているところを、詩人に見いだされたのである。

さて、この断片は、すでに述べたように、次の難解な謎の言葉で切れている。

'Then, what is life? I cried.'—

もしパンクチュエイションがこのまま正しいとすれば、これは、ルソーの叫びであろうし、引用符の位置が間違つているとすれば（これは、充分、ありそうなことだ）、シェリの問いということになろう。いずれにしても、われわれは、なんらかの答えを予想できないであろうか。はたして、人生とはなんであろうか？　それは、前に引用したストーウェルの言葉のごとく、「現世における人間社会の悪の面」を意味するのであろうか。それとも、多分に東洋的な「欲望」といつたものであろうか。自分を知りえず、欲望を抑制しえない者は、すなわち、この世俗との戦いに敗れたのであり、どこをも知らず、世俗の車に従つてゆかねばならぬのである。プラトンに欠けていたものも、まさに、この抑制に他ならない。世俗は「愛」によつてプラトンを征服したのであつた。とにかく、『アドネイス』（*Adonais*）において、

The One remains, the many change and pass;
Heaven's light forever shines, Earth's shadows fly;
Life, like a dome of many coloured glass,
Stains the white radiance of Eternity,
Until Death tramples it to fragments. — Die,
If thou wouldst be with that which thou dost seek![12]

（ただ一つ実在は変らず、もろもろの現象は移り変る。
天の光はとわに輝き、地の影は消えゆく。

人生は色さまざまの色ガラスの円天井に似て、
永遠のまばゆい光をけがす、
死がそれを踏み砕くまで。——死ね、
汝の求めるものとともにありたいと望むならば！）

と叫び、人生に対して並々ならぬ洞察を示した詩人は、今や、「現世の徐々たる汚れの感染」を、情熱と意志、欲望と抑制の観点から実感しようとするにいたつたのであろう。

この詩について、ダウデンは次のように考えている。

「この詩には、シェリの詩、そして、おそらくは、シェリの生活が、彼の追求する理想と彼の取り扱う実際の出来ごと、生きている男女との調和したものとなる希望が含まれている。[13]」

このことは、しごく妥当といわねばならない。とはいえ、この詩は、その陰鬱な、あるいは絶望的とも見える暗い雰囲気から誤られるように、決して詩人の理想主義の放棄を意味するものではないことに、注意がはらわれねばならない。スペンダーの言を借りれば、[11] この詩は「たしかに、個々の人間についての深まりゆく知識によつて修正された、シェリの人間性の展望となるように作られた。彼の心に映じた人生は、もはや、昔のようにはつきりと、黒と白、悪魔と天使、圧制者と被圧制者に分れない。それは、両者のいりまじつた情景である。……」しかし、ダンテの場合のごとく、「光は人間の悲劇をも貫いてかがやきつづけるのであつて、そうした悲劇は、詩の全体にわたる構想の一部分にすぎないのである。」

事実、愛はまだ世界の至高の王座からおりてはいない。それは、よくいわれることであるが、ルソーがダンテにつ

いて語る次の数行からも推量されるであろう。

Of him who from the lowest depths of hell,
Through every paradise and through all glory,
Love led serene, and who returned to tell
The words of hate and awe; the wondrous story
How all things are transfigured except Love;(15)

（地獄の底から
栄光かがやく天国を、
静かに愛にみちびかれた人、憎しみと畏れの言葉を語るべく
帰りきた人、愛のほか、あらゆるものが
いかに変りゆくかの不思議な物語を。）

詩人は、愛の力によって、征服者たる世俗を却って征服することを望んでいるように思われる。それは、神聖な少数者のみが能くするところであるかもしれない。しかしながら、幻に見るかの燦然たる栄光にかがやく姿は、精霊のごとく黙して、絶えず、われわれの進路に感ぜられはしないであろうか。それは、『神曲』と同じく、まさに「愛のほか、あらゆるものがいかに変りゆくかの不思議な物語……」を語るよう、構想されたものであった。

ところで、ベイカー（Carlos Baker）は、この詩と、それに先だつ諸々の詩との間に、三つの主要な相違点を見いだ

している。[16] まず第一に、『世俗の凱旋』は、専ら現世に焦点をあわせ、永遠の生は、ほとんど忘れ去られんばかりである。もちろん、前に述べたように、後者に内在する価値は、なお、いたるところに感じとられはするけれども。

第二に、この詩においては、シェリは、主人公というよりも、むしろ、傍観者である。『エピサイキディオン』では、シェリ自身、あるいは彼の創造的精神が、直接の関係者であるし、キーツの死をいたむ哀歌『アドネイス』においてさえ、いつしか、シェリ自身の理想化された自画像が、詩の前面におしだしてくる。ところが、この詩では、詩のはじめにも歌われているごとく、詩人はただ公道のほとりにたつて、世俗の凱旋行列をながめているにすぎない。興味の中心は、世俗と闘うシェリよりも、人々の、そして自分の、内的生活を解説するルソーその人にあるといえよう。

第三は、世俗を表現するイメージの変化である。『エピサイキディオン』における 'dreary cone of our life's shade' 『アドネイス』における 'lowering mist, charnel-house gloom, and night-shadow' が、いまや、'ice-cold brassy glare intenser than the noon — light so harsh that it obscures the supernal sun' となつている。そして、この新しい象徴は、「自然の事実とより緊密に符合するゆえに」、他の二者より好ましいものだと、ベイカーは考えている。

この場合、前の二つの相違点は、エリオットが「より偉大な智慧」とよんだものに、第三の点は、「よりすぐれた書き方」に、主として、連なるのではあるまいか。すなわち、ベイカーがあげたこの詩の「智慧」は、そのまま、シェリの重大な二つの欠点——現実からの遊離と、主観性の過剰とを、修正することになりはしないか。

もとより、ここにも問題がないわけではない。たとえば、次のような説も、でてくるであろう。結局、『世俗の凱旋』は断片に終つているのだ。もしこの詩が『プロミーシュウス解縛』(*Prometheus Unbound*) と同じ長さになつたら、その結びは、同じように楽天的なものとなつたであろう。『プロミーシュウス解縛』だつて、人間の悪を、『世俗の凱旋』に劣らず、充分に表わしているではないか。最初の五四四行だけが残つたとすれば、『プロミーシュウス解

縛』の断片は、ただ、プロミーシュウスの苦悩、三千年の縛めの苦痛ののち、自分の呪いを思いだし、さらに激しい苦悩にさいなまれる彼の描写で終るであろう。このようにも論ぜられよう。

しかしながら、苦悩するプロミーシュウスは、単なる一個の血肉をそなえた人間ではない。それは、人類を、あるいは、人間の心、それに光明をあたえる智慧ともいうべきものを表わしているように思われる。彼は、「山の岩に鎖でしばられた人間としてよりも、むしろ、高揚する生命の山なすあらわれ」[17]として描かれているのだ。したがつて、『プロミーシュウス解縛』における、彼とジュピターとのたたかいは、歴史を貫き流れている抽象的な力と力とのたたかいであるといえよう。『世俗の凱旋』においては、このたたかいが、個々の人間の内心の問題として、探究されている。しかも、彼の師プラトン、「彼らが歌つた情熱に溺れなかつた」古代の大詩人たちさえも、世俗の囚縛を免れないのである。詩人はこの現実を直視する。苦悩のうめきも、絶望のさけびもあげない。目を蔽つたりもしない。

詩人はさきに「人生は色さまざまの色ガラスの円天井に似て、永遠のまばゆい光をけがす、死がそれを踏み砕くまで。——死ね、汝の求めるものとともにありたいと望むならば！」と歌つたが、『世俗の凱旋』において、彼が問題としたものは、この永遠の光をさえぎる「禍」である人生、『この世に生きる人々が人生と呼ぶヴェール』[18]そのものに他ならない。いかにして世俗の腐蝕を免れるかは、また、別の問題であろう。したがつて、シェリがくりかえし歌つてやまなかつた「死」——「世俗」と対決する「死」による「永生」は、この詩が断片としてとどまるかぎり、永遠に歌われることはないのである。

ベイカーは、シェリが「世俗の徐々たる汚れの感染」と呼んだものを免れる手段として、前述の「死」による「永生」のほかに、次の二つを手紙であげていることを、指摘している。すなわち、一八二一年八月、ラヴェンナ（Ravenna）にバイロンを訪ねていた間に、妻のメアリにあてて書いた手紙のなかで、妻子とともに海中の孤島にこもり、世間への門をとざし、あらゆる人との交わりを絶つこと、いま一つ、できるかぎり知性感情において相似たものが、

一つの社会を作つて、その社会と利害を一にすることをあげている。そして、シェリは、以上の三つの方法のうち、第二のものを実行に移そうとしていた、とベイカーは述べているが、それは、いま、問題として論ずる要はない。

死の九日前、六月二十九日に、彼は、友人ホレス・スミス（Horace Smith）にあてて次のように書いている。

「思うに、現存宗教は、政治上の諸制度と同様、人類を抑制し指導するには無効であることについて、すべての人が率直に自分の感ずるところを述べることが必要な、そのような危機に、今や、事態は立ちいたつております。われわれは、それが何であれ、真実を見なければなりません。人間はただ死ぬために生れてきたというほどに、人間の運命が堕落しているはずは、ほとんどないでしよう。——そして、たとえ、これがその通りだとしても、いろんな迷妄、とりわけ、現存宗教のとてつもない迷妄が、それを刺戟しているとは、ほとんど考えられません。誰もが自分の考えていることを言うなら、それは一日も続かないでしよう。しかし、すべての人々は、多かれ少なかれ、自分を環境に屈従させており、彼らが悲しむ悪の数々に、それらから起る偽善によつて、力をかしているのです。——」

たしかに、暗いといえば、暗い。しかし、死のヴェールのかなたに、「実在」があるとしても、「死ね！」と歌うだけでは、充分とはいえない。人生にもまた、追求すべき「真実」があるであろう。「人間はただ死ぬために生れてきたというほどに、人間の運命が堕落しているはずがあろうか。」彼が対決したもの——それは「人生」そのものであつた。

〔註〕

(1) T. S. Eliot: *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, pp. 87–102.

(2) Herbert Read: *In Defence of Shelley and Other Essays*, pp. 26–7.

(3) Stephen Spender: *Shelley*, p. 1.

(4) *The Triumph of Life*, 182–8.

(5) Edward Dowden: *The Life of P. B. Shelley*, p. 553.

(6) James A. Notopoulos: *The Platonism of Shelley*, p. 317.

(7) *The Triumph of Life*, 128–31.

(8) *Essays and Studies* by Members of the English Association, vol. v, pp. 113–4.

(9) *The Triumph of Life*, 99–106.

(10) *Ibid.*, 239–40.

(11) *Ibid.*, 255–9.

(12) *Adonais*, 460–5.

(13) Edward Dowden: *op. cit.*, p. 553.

(14) Stephen Spender: *op. cit.*, pp. 32–3.

(15) *The Triumph of Life*, 472–6.

(16) Carlos Baker: *Shelley's Major Poetry*, pp. 256–7.

(17) Stephen Spender: *op. cit.*, p. 30.

(18) *Prometheus Unbound*, III, iii, 113.